

## 地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育に関する意義と課題 (2)

——「喪失の語り」と「支援」をめぐる語り——

加藤 謙介

Significance of and problems with pet companions owned by elderly people in need of care (2)

—— Narratives concerned with “loss” and “support” ——

Kensuke KATO

### Abstract

In this study, the relationship between pets and elderly people who need care was examined through a narrative approach. Semi-structured interviews were conducted with four elderly residents of Nobeoka City, Miyazaki, and with professionals who have the ability to support elderly people's caring for pets (i.e. a social worker, home-care workers, a pet sitter and administrative officers). The interviewer asked about the relationship between the elderly people and their pets, specifically about any benefits or difficulties in their daily life. The results of the interviews revealed that even those elderly people who had lost their pets linked their own life stories to their pets, structuring them according to their relationship with their pets. In contrast, the professionals often emphasized the difficulties for elderly people in caring for pets. The study suggests that we need to construct a social support network, in particular, a ‘narrative community’ to listen attentively to elderly people's narratives as a way of supporting the relationship between the elderly and their pets.

**Key words** : elderly residents in need of care, pets, narrative approach, narratives concerned with “loss”

**キーワード** : 要支援・要介護高齢者, ペット飼育, ナラティブ・アプローチ, 喪失の語り

2011.11.24 受理

### 問題

高齢社会を迎え、要支援・要介護高齢者の地域での生活を支えるために、様々な社会資源のネットワーキングが求められている。そのような中、高齢者の生活を支える存在として、「ペット」に代表される人と動物との関係に注目が集まっている(安藤 2003)。海外の調査研究では、ペット飼育が、地域で生活する高齢者に対して、生理的・心理的・社会的な良い影響をもたらすことが指摘されている(例えば, Baun, Johnson, & McCabe=2007)。その一方、飼育者である高齢者の心身の状態・経済状況・家族構成等によっては、逆に、ペット飼育が様々な

負担・問題の原因となりうるということが指摘されている(山口 1999; 柴内 1999)。しかしながら、特に要支援・要介護高齢者のペット飼育に関して、その利点・問題点を含めて検討した論考は多くはない(加藤 2011)。要支援・要介護高齢者のペット飼育は、その意義だけでなく、トラブル発生時の対応や支援のあり方も含めて、未だ十分に社会的に顕在化していない「問題」の1つであると言えよう。

このような問題に対して、まずは、当事者である高齢者自身の語りを丁寧に聴き取るところから始める必要があるだろう。そのためには、当事者自身の語りを重視した「ナラティブ・アプローチ」(野口 2010a)が有効で

あると考えられる。ナラティブ・アプローチは、巷間に流布した支配的言説（ドミナント・ストーリー）に隠蔽された、当事者の「いまだ語られていない物語」（オルタナティブ・ストーリー）に接近するアプローチである（野口 2010b: 265-266）。ペットとの関わりをめぐる高齢者自身のナラティブを検討することで、高齢者とペットとの関係の意義について考察を深めることができるだろう。

また、高齢者がペットとの関係を継続し、自身にとって望ましい生活を維持するためには、様々な立場からの支援が必要になると考えられる。高齢者のペット飼育支援のように、専門職が業務として対処することが確立されていない事柄に関しては、さしあたって、支援に携わる可能性のある人々が、どのような「社会問題」として捉え、語るのかについても、検討を進める必要があると言える。

以上を踏まえ、本研究では、地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育支援の意義と課題について検討を行った。具体的には、介護保険サービスを利用する高齢者のペット飼育経験者、及び、ペット飼育の支援に携わる可能性のある専門家らの語りを取り上げ、当事者、及び、支援者が、この問題をめぐってどのような語りを示すかを検討した。その上で、当事者の語りの特徴、及び、高齢者のペット飼育支援の可能性について考察を試みた。

## 方法

2010年6月から9月にかけて、宮崎県延岡市に居住する介護保険サービスの利用者（以下、利用者）、及び、利用者のペット飼育支援に関わる可能性のある専門家（以下、支援者）に対して、半構造化面接を実施した。

### 1. 対象者

1) 利用者 市内にて介護保険サービスを利用するペット飼育経験者のうち、担当の福祉職員に選定を依頼し、本調査に協力が得られた4名（女性4、平均年齢75.75歳）を対象とした。

2) 支援者 支援者としては、高齢者福祉の専門家3名（地域包括支援センター職員1名、ホームヘルパー2名）、動物飼育支援の専門家1名（ペットシッター1名）、行政職員4名（市生活環境課職員2名、保健所職員2名）の3群を対象とした。

### 2. 調査手続き

1) 利用者 面接は、利用者の自宅で実施した。面接に際して、本調査の主旨を文書で説明した後、書面にて

調査協力の承諾を得た。

利用者4名のうち、面接の際に家族が同席したのは1名、ホームヘルパー等福祉職員が同席したのは4名、飼育しているペットが同席したのは2名であった。このうち1名は、本人からの聞き取りが困難であったため、同席した家族・担当の福祉職員から回答を得た。また、全員の聞き取りにおいて、九州保健福祉大学社会福祉学部在籍する学生1名も同席した。

聞き取りに際して、以下の質問項目を設定した。(1) 利用者自身に関する事柄：年齢、同居家族の有無と構成、日常生活のリズム、既往症等。(2) 現在飼育している、あるいは過去に飼育した中で最も印象に残っているペットに関する事柄：ペットの品種・飼育年数、飼育するようになったきっかけ、日常生活における利用者との関わり方、ペットから得られているもの、ペット飼育で生じた変化、一番の「思い出」、自分にとってのペットの位置づけ等。(3) ペットを飼育する上で利用者が直面する問題点・心配事：住環境の問題、近隣トラブルの有無、衛生管理にかかるコスト、しつけの問題、エサ代・医療費等の経済的問題、外出時の不便、飼育上の心理的不安等。それらの問題に対する利用者自身の対処方法、問題の相談相手等。

筆者らは、利用者に質問項目のリストを提示しながら聞き取りを行ったが、話の流れに応じて、適宜質問の順番を入れ替えた。また、本人が答えたくない質問については無理に話さなくてもよいことを事前に伝えるとともに、インタビュー中も十分に注意した。記録については、聞き取り中にメモを取るとともに、許可が得られた3名分はICレコーダーで録音した。利用者のペースに合わせた結果、聞き取り時間は、約1時間～2時間となった。

2) 支援者 面接は、ホームヘルパー主任、地域包括支援センター職員については各事業所にて、ペットシッターは自宅で、行政職員は各担当部署で実施した。ホームヘルパー主任2名、生活環境課職員2名、保健所職員2名は、それぞれ同時に聞き取りを実施した。

聞き取りに際して、高齢者福祉の専門家には、以下の質問項目を設けた。(1) 利用者をめぐる諸状況に関する事柄：地区の地域性、サービス利用者の全体的特徴等。(2) 担当利用者のペット飼育に関する事柄：利用者のペット飼育の現状、利用者の傾向、ペット飼育による利用者のメリット・デメリット、トラブルとなった事例の有無とその対処、福祉業務における利用者のペット飼育の位置づけ、自分以外の専門家との連携、総合的な判断による要支援・要介護高齢者のペット飼育の是非等。

ペットシッターに対しては、次の質問を尋ねた。(1)

現在の業務内容・これまで関わってきた動物関連の社会的活動。(2) 延岡市における高齢者のペット飼育に関する事柄：これまでにかかわってきた高齢者関連の事例、高齢者のペット飼育への支援の在り方、これまでに連携することができた個人・組織、高齢者がペットとともに最後まで生活するために必要な事柄等。

行政に対しては、以下の質問項目を設定した。(1) 延岡市におけるペット飼育の現状。(2) 各部署におけるペット飼育関連の業務内容に関する事柄：特に高齢者がかかわるペット飼育をめぐる問題とその対応、問題に対する他部署等との連携の現状と課題、市民のより良いペット飼育を支援するために必要な事柄等。

支援者への聞き取りは、利用者同様、質問項目のリストを提示しながら行ったが、話の流れに応じて、適宜質問項目の順番を入れ替えた。また、会話内容は許可を得てICレコーダーで録音した。聞き取り時間は、約1時間～2時間であった。

### 3. 分析方法

各インタビュー結果について、録音内容をもとに逐語記録を作成した。その上で、利用者については、自身とペットとの関係が語りの中にどのようにあらわれるか、その特徴を整理した。また、支援者の語りからは、それぞれの立場から、要支援・要介護高齢者のペット飼育をどのような「問題」と捉えているかを検討した。

## 結果

### 1. 利用者への聞き取り結果

利用者への聞き取りは、概ね和やかな雰囲気で行われた。以下では、利用者のペット飼育の状況、ペットとの関係をめぐって利用者へ共通してみられた語り、死別したペットとの関係に関する語りの3点を整理する。なお、利用者らの語りを直接引用した箇所は斜体字で表記した。また、筆者が前後の文脈から内容を補足した部分は、引用文中の丸括弧内に補足した。

1) ペット飼育の状況 インタビューに協力が得られた利用者のうち、4名中2名が、現在ペットを飼育(犬1・鳥1)していた。また、1名は聞き取りの2年前、1名は2ヶ月前にペットと死別していた。飼育者のうち、1名は家族と同居、1名は近くに親類が住んでおり、散歩やトリミングなどの手間のかかる世話は親族が担っていた。

2) ペットとの関係をめぐる語り 利用者にとって、ペットが、他者との交流のきっかけや孤独感の減少、安

心感をもたらす存在となっていることを示唆する語りが得られた。一方で、飼育に際しての経済的負担や外出時の不便、死別時の喪失感、適正飼育の困難など、様々な問題を引き起こす可能性も示唆された。

3) 死別後のペットをめぐる語り 死別したペットをめぐる、利用者が、独特の語りを示すことがあった。ここでは2例を挙げる。なお、会話例の通し番号として、引用した語りの文末に、利用者の仮名と数字を組み合わせた記号(例えば、A-1)を記した。

a. Aさんの語り Aさんは、24年間飼育してきた猫(「さんちゃん」と2年前に死別した。担当の福祉職員から、「ペットとの関係を聞きたいならAさんが良い」と勧められ、筆者らは、Aさんと猫との関わりについて聞き取りを行った。以下は、インタビュー開始直後、質問項目の説明を始める前の、Aさんと筆者らとのやりとりの一部である。

【A】「これがそこのデイサービスですよ、短歌のあれがあったとですわ。あれに猫ちゃんのことをね。もう猫しかないからうちは。1年に1回出すのね。このひとのを出したらね、全国で佳作に入ったんですよ。2年前に。これが佳作です」

【職員】「私も初めて(見せてもらう)・・・」

【A】全国じゃからね、佳作っちゅってもね。みんな喜んだけど私あもう「へえ～」ぐらいしか思わないですよ。去年はこれやったです。猫ちゃんばかり。

『24年 ともに過ごせば 我よりも 一歩先行く  
老猫の知恵』

『おるすばん 頼みましたよと 老猫に 声かけて  
いく デイケアの朝』(A-1)

また、聞き取りの最中も、自身と猫との関わりについて、日常生活の一コマを細やかな表現を用いて語ることがあった。

【A】「さんちゃんはね、知恵があつてほんとに。私もりも上行きよつたですわ。猫ん知恵は本当人間以上なものもあるよ」

——「何か、頭いいな一つて思うことがあったんですか？」

【A】「あつた～、年中あつた。帰ってくるとね、私が杖つぱつぱってよいしょよいしょ行くとね、私の

前を通って、俺に付いて来いちゆうみたいだね、  
後ろ振り返って振り返って先導しよったんです  
よ。もう何年もね」(中略)

—「だからさっき、ああいう歌を詠まれたんですか？  
老猫の知恵って」

[A]「うんうん」

—「これ(短歌の内容)は、じゃあ、Aさんの暮ら  
しそのまま」

[A]「そうです。・・・でも、さんちゃんおらんごと  
なったらいい歌もできんですわ。さんちゃんが  
教えてくれんから。知恵を貸してくれんから。」  
(A-2)

このように、Aさんは、筆者らが質問を始める前に、  
自身と猫との関わりを、趣味の短歌の話題を交えて活  
き活きと語った。特に、生活の細部にまで猫との関わりが  
あり、それが良い短歌を詠むための力となったこと、猫  
が死んだ後は短歌も詠めなくなったことを強調した。ま  
た、詠まれた短歌も、日常生活の何気ない一コマを、猫  
との関わりを通して描いたものであった。

b. Bさんの語り Bさんは、飼育していた犬(「ケン  
ケン」と2ヶ月前に死別した。犬が死んだ原因は、B  
さんの外出中に犬を屋外に置いたままにしており、その  
結果、熱中症になってしまったことである、とBさんは  
語った。Bさんは、犬の死を、自分の不注意の結果であ  
ると非常に後悔していた。以下は、Bさんと犬との関わり  
に関する語りの一部である。

—「ケンケンちゃんと一緒にいる時は、どんな気持  
ちでした？」

[B]「もうなんて言いますか、寂しさがなくなるって  
いうような感じですね。あの一、なんて言いま  
すか、頼りになりよったですね。寂しさがね、  
どっか吹き飛んだような。私もデイサービスと  
か行ってきて帰ってきてケンケンがいるでしょ。  
そうするとまたケンケンもまたいろいろ喜んで  
ね」(B-1)

—「ケンケンちゃんと飼う前と飼った後で、何か変  
わりがありましたか？」

[B]「そうですね、やっぱり・・・犬がおらん時は  
ですね、本当寂しかったですわ。本当1人でした  
からね。寂しかったですわ。犬がおるとものす  
ごく頼りになりよったですよ。かわいくてね。  
でもおらんくなったなら、もう穴が空いたよう

な気がしてからですよ」(B-2)

—「ケンケンちゃんを飼ってて、困ったこととかあ  
りましたか？」

[B]「困ったっていうのが、私が置いていく時にね、  
頭から離れんとですよ。外出してる間ですよ  
ね。大丈夫かなって気にしてたんですけど、や  
っぱダメでしたね」

—「犬だけ残すのは不安がありますよね」

[B]「やからこんなにしても寂しいところに1人でいる  
もんやからね。寂しいですよ」(B-3)

Bさんの住居は、地区のやや奥まったところにあり、  
近隣住民との交流はそれほど多くはないとのことであ  
った。しかし、近くに親族が住んでおり、ほとんど毎日、  
Bさんの世話に来ていた。にもかかわらず、Bさんは、  
自身の日常生活を「寂しさ」ということばを多用して語  
り、その寂しさを、犬がなくしてくれていたことを強調  
した。さらに、その犬を「自分の不注意で」死なせてし  
まったことを悔い、今はまた寂しい生活になってしまっ  
ていることを繰り返し語った。

## 2. 支援者への聞き取り結果

高齢者のペット飼育に関して、支援者からも様々な語  
りが得られた。以下では、高齢者のペット飼育の状況、  
及び、高齢者のペット飼育のメリット・デメリットに関  
する語り、高齢者のペット飼育をめぐる諸問題に関する  
語り、の3点を整理する。

1) ペット飼育の状況 インタビュー時点で、ホーム  
ヘルプサービス利用者のうち、ペットを飼育しているの  
は58件中2名(犬1件、鳥1件)であった。飼育者が  
2件しかないことについて、利用者のほとんどが独居で  
あることが原因ではないかとの意見が聞かれた。また、  
地域包括支援センターでは、正確な飼育者数は把握して  
いないが、利用者のうちの数%がペットを飼育してい  
るのではないかと、との意見が得られた。

2) 高齢者のペット飼育のメリット・デメリットに関  
する語り 要支援・要介護高齢者のペット飼育に関し  
て、メリットとともに、様々な問題点も指摘された。

高齢者福祉の専門家からは、ペットの存在が利用者にと  
って「癒し」や「寂しさを紛らわす」などの心理的支  
援をもたらしているとの指摘がなされた。また、「生き  
がい」「世話をする対象」「話しかける対象」など、ペ  
ットが利用者の社会関係を促進しているとの意見も聞か  
れた。一方で、病気等で心身が弱ることで世話が困難にな

り、糞尿の始末等の「衛生管理」ができなくなる事例があることが挙げられた。加えて、ペットに引かれての転倒等の懸念、ペットとの死別に関する不安、自身の食費を切り詰めてペットに餌をやるなどの経済的問題があることや、近隣住民とのトラブル等の問題が生じているとの意見もあった。

ペットシッターからは、高齢者はペットを「家族」として丁寧に扱い、ペットから「生きがい」を得ている人も多いとの意見が得られた。その一方、飼育者である高齢者が死亡した後に、遺された家族でのペット飼育が困難になり、その結果、保健所に持ち込まれる事例があることも示された。

行政職員からは、市民のペット飼育に際して、飼育者の家族構成や年齢まで把握することはないため、「高齢者のペット飼育問題」として捉えることはないとの意見があった。ただ、保健所には、「飼主が高齢になったため」という理由でペットが持ち込まれる事例が年に数件あるとのことだった。

3) 高齢者のペット飼育をめぐる諸問題に関する語り  
上述した高齢者のペット飼育のメリット・デメリットに加え、ペット飼育に関わる様々な問題について、支援者から語りが得られた。ここでは、3点整理する。

第1に、通常業務内での「ペット飼育」の位置づけに関して、福祉職員からは、(業務内では)支援できる時間が限られているため、ペットのために割ける時間がないとの意見が寄せられた。また、「限られた時間の中で」作業をする職員にとって、利用者との関わり方のメリットは認めつつも、「ペットの存在は障害として捉えられることがほとんど」であるとの語りも得られた。さらに、利用者がペットからメリットを受けていると職員らが感じられるのは、飼育が問題なく行われている事例であり、その場合、職員は、「ペット飼育によるメリットについて注意を向けていない」こともあるとの意見もあった。そのため、福祉現場で利用者の動物飼育が話題になるのは、概ねトラブルの発生とその対応に関わる場合であるとのことであった。

第2に、ペット飼育によるトラブル対応に際して、他部署・他機関との連携の困難さを示唆する語りが得られた。筆者らが、トラブル対応に際しての連携先について尋ねたところ、福祉職員は、獣医師や愛護団体等の動物の専門家との連携について「思いつかなかった」「やった方がいいとは思いますが、(困難事例への対応が)大変だということで頭がいっぱいになる」との見解を述べた。また、ペットシッターに対して、高齢者担当の行政部署との連携の可能性について尋ねたところ、「考えたこと

がない。(高齢者の問題なのに、言われてみれば)不思議だ」と述べた。

第3に、ペット飼育の責任の所在に関する語りを得られた。福祉職員は、ペット飼育は「家族の問題」であると述べた。行政職員も、ペット飼育及びそれによるトラブルは「(飼主の)モラルの問題」であり、動物の飼育は「飼っている人が責任を持って解決すべき」との意見を寄せた。また、「行政が飼い方まで支援できない」との意見もあった。

## 考察

本調査の結果、要支援・要介護高齢者のペット飼育をめぐる、高齢者・支援者の双方から様々な語りが得られた。本章では、これらを踏まえ、高齢者、及び、支援者の語りの特徴について考察する。その上で、要支援・要介護高齢者のペット飼育の支援の可能性について検討を試みる。

### 1. ペット飼育をめぐる利用者の語り：死別したペットとの関係を中心に

聞き取りの中で、利用者らは、ペットとの関係について、「孤独感を減らす」「安心感をもたらす」などのことを用いて、概ね良好なものとして語った。こうした語りは、ペットと飼い主との関係をめぐる「モデルストーリー」(桜井 2002)の1つであると考えられる。

一方、死別したペットとの関係については、独特な特徴を示す語りも得られた。ここでは、特に、死別したペットとの関係をめぐる語りの特徴について考察を深めてみよう。

ペットとの死別経験とそれに対する反応は、「ペットロス」と呼ばれている(横山 2003)。「ペットロス」という用語自体、一般にはまだ十分理解されておらず、ともすれば病的な反応として捉えられることもある(藤田・横山 2010)。しかし、ペットとの死別経験は、典型的な「対象喪失」(小此木 1979)の過程の1つであり、ペットと人との差異については考慮しつつも、ペットとの死別の悲しみを「病気」と断じるのではなく、適切な悲哀の過程を辿れるようにすることが重要になると考えられる。

ところで、喪失体験について、やまだ(2007)は、「死」は単なる喪失ではなく、長い時間の中で行われる人生の物語(life story)の変容・再構成プロセスの一環として重要な意味を持つと指摘している(やまだ 2007: 81-83)。加えて、喪失体験の自己の人生への組み込み、意味付け

が、当事者の「語り」の中にあられることを論じている(やまだ 2007:109)。物語論に関する議論から補足すると、このような、語り表れた喪失体験、すなわち「喪失の語り」は、他者との相互作用の中で、「物語の共同的承認」(麻生 1996)がなされることで、「現実」として構成されることとなる。逆に、語りが他者に適切に聴いてもらえないと、喪失体験に基づくライフストーリーの再構成が達成できないことがある。特に、ペットとの死別に関わる悲哀は、他の喪失体験と比べて、周囲の理解を得られにくいことがある(横山 2003:70)。新島(2002)は、ペットの喪失体験に関する語りを分析し、自身と他者との間で、ペットの死に対する意味づけにギャップが生じ、適切に悲しめなくなってしまうことを、「リアリティ分離」という語を用いて論じている。

以上の議論を踏まえて、本調査で得られた、死別したペットとの関わりをめぐる利用者の語りについて見てみよう。Aさんは、死別後2年を経ても、飼育していた猫との関わりについて生き活きと語った(会話例:A-2)。特に、短歌に表されているような、生活の細部の一コマを切り取ったような語りが特徴的であった(A-1)。これは、Aさんが、死別後も、猫との関わりを通して、自身のこれまでの生活を再構成して語っていることを表していると考えられる。Aさんと猫とは親密な関係を築いており、死別までの24年間をともに過ごしてきた。だからこそ、猫とのかかわりは、Aさんの生活の細部についての語りとして示され、そのような語り、及び、そのように猫との関わりを語ることは、Aさんのライフストーリー再構成の重要な一部となっていると言える。

一方、Bさんは、インタビュー時点では、愛犬との死別から2ヶ月程度であり、まさに悲哀の過程の途上にあつたと考えられる。それゆえ、犬との関わりだけでなく、自身の生活の過去・現在についてさえも、「寂しさ」ということばでしか語ることができなかったのではないだろうか(会話例:B-1, B-2, B-3)。このことは、ペットとの死別により、Bさんのライフストーリー再構築が途絶していることを表している。重要なのは、だからこそ、犬との関わりをめぐるBさんの語りを丁寧に聴き取る必要があるということである。喪失体験をめぐる語りは、適切に聴かれることで、ライフストーリーの再構成へと導かれていく。「リアリティ分離」を生じさせず、悲哀の過程を適切にたどるように支援するためにも、Bさんが示したような喪失の語りは、注意深く聴き取られなければならないと言えるだろう。

両者の事例は、ペットとの関わりが、死別後もなお、高齢者のライフストーリー再構築に重要な役割を果たし

ていることを示唆していると考えられる。高齢者とペットとの関係については、その「喪失の語り」についても、十分な配慮をもって聴き取る必要があるだろう。

## 2. 高齢者のペット飼育をめぐる支援者の語り

本調査では、要支援・要介護高齢者のペット飼育の支援に携わる可能性のある専門家からも、様々な語りを得ることができた。福祉職員、動物の専門家、行政職員ともに、高齢者の動物飼育のメリットを指摘する発言があった。特に、心理的支援や社会関係の促進などのメリットに関する語りは、ペットが人にもたらす良い影響としてしばしば指摘されるものであり、ペットとの関係に関わる「モデルストーリー」の1つであると考えられる。

一方、デメリットとしては、衛生管理の困難、飼育に伴うケガの危険性、経済的問題、近隣とのトラブル等が指摘された。支援者らは、高齢者のペット飼育のメリットを認めつつも、むしろ、デメリット、及びトラブルの方に関心に向け、それへの対応に苦慮していることが示された。こうした語りは、支援者らにとって、ペット飼育をめぐる利用者の「当事者の語り」を聞き取ること自体が、困難な状況にあることが示唆されたと言える。

誤解のないように付記すると、筆者は、いたずらに支援者の批判を行いたいわけではない。本調査に協力が得られた支援者らは、自身の職責を全うしようと努めておられた。重要なのは、そのような支援者らの懸命の努力「にもかかわらず」、利用者のペット飼育に関わる事柄が、しばしば「困難な問題」として捉えられている、ということである。この点について考察を進めてみよう。

野口は、援助職等の有する専門的判断の理論的枠組み自体が、特定の語りだけを選択的に聴いてしまい、それ以外の語りを無視してしまう事態が生じると述べている(野口 2010b:264-265)。つまり、専門知というドミナント・ストーリーが、当事者自身の語りというオルタナティブ・ストーリーの生成を困難にしているという指摘である。こうした事態について、精神保健福祉分野で長年援助に携わってきた向谷地は、「聴くことが真のことばを封じ込める」(向谷地 2009:87)という表現を用いて論じている。

野口や向谷地らの議論は、専門知や制度それ自体が、当事者との「いまだ語られていない物語」の生成を困難にしうることを示唆している。本調査に協力が得られた支援者らは、介護保険制度や、動物愛護(及びその管理行政)といった諸制度の下で職責を果たしていると考えられる。現行のこれらの制度では、「要支援・要介護高齢者のペット飼育問題」について、明示的に取り扱われて

いるわけではない。それゆえ、利用者のペット飼育について、専門家らは「限られた時間の中で」関わらざるを得ず、メリットについても「注意を向けることはない」。つまり、ペットをめぐる利用者自身の「いまだ語られていない物語」を聴き取ることが、そもそも困難な状況となっていると考えられる。

また、動物愛護や動物の適正飼養の法的根拠である「動物の愛護及び管理に関する法律」(環境省 2011)には、第7条に、動物の所有者又は占有者の責務等が明記されている。この条文は、要支援・要介護高齢者であっても、ペット飼育は「飼い主と家族の問題」であることを示している。このため、もし高齢者がペットの飼育が困難な状況になったとしても、福祉・動物の専門家は、それがあくまでも「利用者と家族の問題」であると見なし、自身が介入・支援すべきではない「問題」と捉えうることが考えられる。

さらに、高齢者のペット飼育、特にその支援に関する問題は、福祉・動物双方の専門家にとって、未だ顕在的に捉えられていない。このため、通常業務の範囲内ではほとんど関わり合うことがない福祉と動物の専門家は、お互いが、この問題の支援のための連携先となりうることが「想定外」(「思いつかなかった」「考えたことがない」と見なされてしまうことが生じうる。

以上で概観したように、現行の諸制度、及びそれに基づくドミナント・ストーリーのもとでは、高齢者のペット飼育支援に対する有効な対応策の考案だけでなく、そもそも、ペットとの関わりに関する高齢者自身の語りを聴き取ることさえ、困難な状況となっていると考えられる。それゆえ、支援者らは、高齢者のペット飼育のメリットを認めつつも、その困難さの方を強調する語りを示したのであろう。

要支援・要介護高齢者のペット飼育支援について考えるためには、まず、当事者による「いまだ語られていない物語」を聴き取り、それを活かす方途を探る必要がある。「ペット飼育支援」という問題に特化しなければ、当事者自身の語りに基づく支援については、既に様々な実践が試みられている(例えば、荒井 2008; 向谷地 2009)。先行事例を参照しつつ、当事者の語りを適切に聴き取ることが求められると言える。

また、当事者の語りを踏まえた具体的な支援のあり方について検討するためには、関係する様々な分野の専門家が連携し、ソーシャルサポートネットワークを構築するなどの対応が必要となると考えられる。高齢者のペット飼育支援は、「高齢者福祉」と「動物飼育」という、一見すると接点がないような2つの領域に関わる、既存の

制度の「外部」の問題である。それゆえ、単に異業種同士の話し合いの場を設ければ、支援のための共通認識が構築されるとは限らない(例えば、加藤 2009)。要支援・要介護高齢者のペット飼育支援を行うには、あくまでも「当事者の語り」を中心に据え、支援のためのオルタナティブ・ストーリーを生成するナラティブ・コミュニティ(野口 2005)の構築を進めるための工夫が求められることになるだろう。

## 謝辞

本調査にご協力頂いた利用者の方々、福祉サービス・ペット飼育の専門家の方々、行政職員の方々、九州保健福祉大学社会福祉学部臨床福祉学科・山崎きよ子教授・小野育恵さんに、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

※本研究の実施に際して、科学研究費補助金(若手研究(B), 課題番号:22730464)の助成を受けた。

## 引用文献

- 安藤孝敏 (2003) 「高齢者とペットとの関係」 桜井 富士朗・長田久雄 編著『「人と動物の関係」の学び方——ヒューマン・アニマル・ボンド研究って何だろう』 インターズー, 193-201.
- 荒井浩道 (2008) 「繋がっていかない利用者への支援——ソーシャルワークにおけるナラティブ・アプローチの可能性」 崎山治男・伊藤智樹・佐藤 恵・三井さよ 編著 『<支援>の社会学——現場に向き合う思考』 青弓社, 114-137.
- 麻生 武 (1996) 『ファンタジーと現実』 金子書房.
- Baun, M. and Johnson, R. and McCabe, B. (2006) Human-Animal Interaction and Successful Aging (=2007, 「人と動物の関わりとサクセスフル・エイジング」 Fine, A. H. ed.・太田光明・大谷伸代 監修『アニマル・アシステッド・セラピー第2版——実践のための理論的基盤とガイドライン』 インターズー, 191-201.)
- 藤田典子・横山章光 (2010) 「日本で取り上げられる「ペットロス」の諸相」『動物観研究』15, 35-38.
- 環境省 (2011) 「動物の愛護及び管理に関する法律」(<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S48/S48HO105.html>, 2011年9月30日) .
- 加藤謙介 (2009) 「コミュニティにおける社会問題の構築過程——「地域福祉」と「猫トラブル」の接続

- に関する事例」『日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会発表論文集』 366-367.
- 加藤謙介 (2011) 「地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育に関する意義と課題——ナラティブ・アプローチの視点から」『九州保健福祉大学研究紀要』12, 21-29.
- 向谷地生良 (2009) 『技法以前——べてるの家のつくりかた』 医学書院.
- 新島典子 (2001) 「ペット喪失体験(ペットロス)はなぜこんなにつらいのか——リアリティ分離・封殺とペット喪失者のつらさの強化について」『現代社会理論研究』11, 225-238.
- 野口裕二 (2005) 『ナラティブの臨床社会学』 勁草書房
- 野口裕二 (2010a) 「ナラティブ・アプローチの展開」野口裕二 編 『ナラティブ・アプローチ』 勁草書房, 1-25.
- 野口裕二 (2010b) 「ナラティブ・アプローチの展望」野口裕二 編 『ナラティブ・アプローチ』 勁草書房, 257-279.
- 小此木啓吾 (1979) 『対象喪失——悲しむということ』 中公新書.
- 桜井 厚 (2002) 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』 せりか書房.
- 柴内裕子 (1999) 「高齢者と動物の絆は21世紀の最重要課題——ヒューマン・アニマル・ボンドの理念から」『Relatio』4, 47-49.
- やまだようこ (2007) 『喪失の語り——生成のライフストーリー』 新曜社.
- 山口千津子 (1999) 「ペット飼育の問題点と今後の課題——高齢者への聞き取り調査からの検証」『Relatio』4, 34-35.
- 横山章光 (2003) 「ペットロスを考える——もうひとつの観点から」桜井富士朗・長田久雄 編著 『人と動物の関係』の学び方——ヒューマン・アニマル・ボンド研究って何だろう』 インターズー, 66-72.